

マタイによる福音書5章21-26節 「殺してはならない」

1A 律法学者へパリサイ人にまさる義

1B 誤った律法の解釈

2B パウロの知った律法の靈的性質

2A 「昔の人々」という言い伝え 21

1B 単なる殺人と裁判

2B 容易に守れるような解釈

3A 兄弟に怒る者 22

1B 心の中の敵意

2B 軽蔑の念

3B 人の悪口

4A 供え物を置いた仲直り 23-26

1B 儀式で償えない関係 23-24

2B 緊急を要する関係 25-26

本文

マタイによる福音書 5 章を開いてください、私たちの山上の説教の学びは、5 章 21-26 節に入ります。私たちは前回、イエス様が、ご自身が律法と預言者を成就するために来たと言われたことを読みました。

1A 律法学者へパリサイ人にまさる義

そして、律法の教師であり律法学者やパリサイ人の義に、あなたがたの義がまさっていないければ、決して天の御国に入れぬ(20 節)ということと言われたところを読みました。そこでイエス様は、彼らの教えていること、その義について語られ、それから、彼らの義にまさる義を教えられます。天の御国に入るための義であります。彼らの教えをまず語られ、そしてご自分の教えと対比させます。合計、六つの例をイエス様は教えられますが、その初めが、「殺してはならない」という戒めについてです。

21-26 節まで読んでみましょう。「21 昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。22 しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。23 ですから、祭壇の上にささげ物を献げようとしているときに、兄弟が自分を恨んでいることを思い出したなら、24 ささげ物はそこに、祭壇の前に置き、行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしてください。それから戻って、そのささげ物を献げなさい。25 あなたを訴える人とは、一緒に行く途中で早く和解しなさい。そうでないと、訴える人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、

あなたは牢に投げ込まれることになります。26 まことに、あなたに言います。最後の二コドラントを支払うまで、そこから決して出ることはできません。」

1B 誤った律法の解釈

ここで今、読んだように、イエス様は、「昔の人々に対して」と言われて、パリサイ派と律法学者の教えていることをまず語られ、それから、「しかし、わたしはあなたがたに言います。」と言われて対比させておられます。あまりにも、その教えが違うので、まるでイエス様は、モーセの律法に対抗して、イエス様がご自分の教えを垂れておられるように聞こえます。いいえ、全く違います。主は、廃棄するためではなく、成就するために来たと言われました。ここでは、モーセの律法とご自身の教えの対比ではなく、律法学者やパリサイ人による、律法の解釈と、律法が真実に意図しているところを対比させています。彼らこそが、律法が教えているところから逸脱して、遠く離れてしまって、それで教えていたのですが、イエス様は、神がその命令の中で意図されていたことを解き明かされたのです。「しかし、わたしはあなたがたに言います。」と言われているところに、イエス様は、ご自身が神本人であり、また神からの方であることを伝えています。

これだけ、律法学者やパリサイ人の教えていたことが、単なる人間の教えに成り果ててしまったことが分かります。私たちは、キリスト者がどんなにまことしやかに聖書の言葉を使って議論していたとしても、それが単なるその人の主張であったり、意見に成り下がっていることがあるのだということを知る必要があるでしょう。

2B パウロの知った律法の霊的性質

パウロが、自分の属していたパリサイ派の律法の解釈に満足していたところから、真実な意味を発見して、それで全く打ちひしがれてしまった文章を、彼の手紙から読むことができます。パウロは、ピリピ書3章6節で、「律法による義については非難されるところがない者です」とあります。それだけ、彼は言うことができるほど、厳格に守っていました。ところが、彼はロマ書7章14節で、「律法は霊的なものであることを知っています」と言っています。霊的なものであり、「欲しがってはならない」という戒めによって、自分のうちにあらゆる欲望が引き起こされ、限りなく罪深いものとなったとも言っています。パリサイ派の解釈によれば、非難されるところのない者であったのに、律法が霊的、つまり神の意図しているように見て行けば、自分にあらゆる欲望が引き起こされて、限りなく罪深い者だというぐらい、大きな違いがあります。

私たちが、パリサイ派的な解釈を勝手に施して、律法の聖さを汚すことのないようにしたいです。

2A 「昔の人々」という言い伝え 21

21 昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われているのを、あなたがたは聞いています。

「昔の人々に対して」というのは、ミシュナと呼ばれる口伝律法と呼ばれるものです。律法学者やパリサイ派の人たちは、昔からの言い伝えを大切にしていました。そして、「あなたがたは聞いています。」とされていますが、彼らが私たちのように、印刷された律法の書を持っていたのではないことを思い出してください。巻き物に書き写されたものだけがあり、しかも、一般の民衆の多くが文盲であったでしょう。ですから、彼らは律法の教師たちに聞くことしかできませんでした。

1B 単なる殺人と裁判

確かに、モーセの律法には、「殺してはならない。」と書いてあります。では、モーセの律法のとおりかと言いますと、そうではありません。「人を殺す者」として、単なる殺人という犯罪に限定していることです。そして、「さばきを受けなければならない」と教えています。これは裁判のことです。つまり、彼らは人殺しをした者は、裁判にかけられなければいけないとだけ、教えたのです。

2B 容易に守れるような解釈

これであれば、「殺人の罪を犯さなければ、この戒めを守ったことになる」わけです。しかも、殺人の罪を犯せば、裁判に引かれていかなければいけないというだけありますから、神への恐れのない人や、異教徒でさえ、そんなこと分かっています。

律法学者やパリサイ派の人たちは、律法の知識があり、律法に対してことさらに厳しいように見えました。容易に守れるような解釈にして、それに熱心であるようにさせていたのです。私たちキリスト者も、ここにおいて自分自身を欺くことができます。熱心であり、聖書の知識が豊富なように見えていても、実は自我というものをしっかり持って、それを変えなくてもよいように、巧妙に聖書の言葉を解釈して、守っているように見せることができるのです。

3A 兄弟に怒る者 22

1B 心の中の敵意

「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。」とイエス様は言われます。人が誰かを殺す時に、その殺人は心から始まります。主は、心の中のことを含めて、私たちの姿勢全体を見つめておられます。ですから、「怒り」ということも含めて、とても深刻に受け止めておられます。律法学者やパリサイ派の人たちは、イエス様の言われたことや行なわれたことで怒りに燃えました。それで、ついにそれが殺意となって、そして実行に移したのです。

そもそも、「怒る」というのはどういうことかを考えたいと思います。人のした悪に対して怒るのは当然であり、キリスト者として成長すればそれだけ、神が憎んでおられる罪に対して、自分も同じように憎み、怒りを抱くようになります。けれども、それは罪に対して怒っているのであって、その人本人に対して怒るではありません。その人は神のかたちに造られたのであり、人そのものに対して怒るのは、神のかたちを否定していることです。ですから、憎しみ、苦々しい思い、敵意を心の中に抱いてい

る時、それは神ご自身に対する反抗そのものであり、なので、裁かれなければいけないと主は言われます。

ここで大事なのは、「**兄弟に対して怒る**」とイエス様が言われていることです。イエス様を殺すことを画策し、実行に移したユダヤ人の宗教指導者は、いわば同業者を殺したに等しいです。イエス様はユダヤ人であり、しかもユダヤ教のラビでもありました。聖書の見方も、サドカイ派ではなく、パリサイ派のそれに似通っていました。イエス様とパリサイ人は全く意見の異なる人々ではなく、むしろ近いからこそ、パリサイ人はこの方を妬み、憎んだのです。ですから、律法が戒めているのは、とても近い存在から、ということです。遠くにいる人ではなく、近くにいる人。近いだけでなく、兄弟でありますから、自分とつながっている人であります。教会は、キリストの体であり、信仰の家族ですから、教会の仲間に対する怒りや憎しみは、殺しの罪に値するということです。

「怒る」とは、自分が正しく、相手が正しくないという立場です。聖書は、怒ることそのものを私たちに禁じているのではなく、怒っても、その怒りを神に任せることを教えています。正しいのは神だけであり、私たちの持っている正しさは、ちっぽけなものです。すべてのことを知っている神だからこそ、公正に裁くことのできる方です。イエス様は、パリサイ人たちに対して厳しい言葉をかたられました。イエス様ご自身も憤りを抱かれたこともあります。しかし、イエス様はその罪や頑なさを嘆かれたのであって、その人たちに対して十字架の上で、「彼らをお赦しください、何をしているのか分からないのです。」と祈られたように、執り成しの思いを抱いておられたのです。

けれども、そもそも、イエス様ご自身が神から来られた方であり、御子ご自身でありますから、イエス様の怒りはいつも正しいのです。神ご自身の怒りです。そして聖書には、神の怒りが前面に出て来ますが、言い換えますと、「怒りは神だからこそ正しく持っていることができる」ということなのです。自分が怒る時、このことを思い出す必要があります。怒ってもよいのですが、怒りは神に任せるのです。その憤みを忘れて自分を怒りに任せる時に、それは、自分自身を神の位置に置いているのです。いや、神でさえ、正しくない者にも雨を降らせてくださる慈しみ深い方ですから、神以上になろうとしているに他なりません。ここにサタンの策略があります、乗じてはいけません。ヤコブは手紙でこう言いました、「1:20 人の怒りは神の義を実現しないからです。」

2B 軽蔑の念

そしてイエス様は、さらに突っ込んで、語っておられます。「**兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。**」最高法院とは、サンヘドリンのことであり、ユダヤ人指導者たちの集まりです。ここで定められたことは、ちょうど最高裁判所の判決と同じであり、もう覆すことはできません。

「**ばか者**」ということは、ここでは軽蔑を指しています。ただ兄弟に対して怒るだけでなく、怒った後に相手を見下し、蔑むのです。誰かに怒っている時は、初めは自分が被害者でそれは正当だと思っているでしょうが、先に話しましたように、自分を正しい位置に置き、つまり自分を神のような位置に

おいて高ぶっているのですから、相手を見下すようになるのは当然のことなのです。ばか者という言葉に回しに表れている、その高ぶりは、神の領域に自分自身を入れていることそのものですから、それで、人間の最高法院ではなく、神の最高法院、つまり最後の審判で裁かれることになるのです。黙示録 20 章 11 節以降に、最後の審判のことが詳しく啓示されています。

私たちが怒り、そして相手を見下すことをしている時に、殺人をしていなくても、その人を破壊する力を持ちます。その人の批評をし、故意の粗捜しをして、その人の評判を貶めています。その人に対する信頼を揺るがすことができます。単に人の肉体を殺すのではなく、心や魂を破壊しようと企てているのです。

怒りというのは、自分が間違っている、自分が罪を犯していると思わせないのが恐ろしいところです。他の罪、例えば淫らな行いであるとか、泥酔であるとか、盗みなども、罪意識を抱きやすいですが、相手を裁いている時は自分を正しいと思うことで行なっていますから、自分を神にしているようなもので、恐ろしいことなのです。けれども、ガラテヤ人への手紙で、神の国に入ることができないと断言している肉の行いの項目において、かなり多く列挙されています。「5:19-21 肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。」敵意から始まり、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、そして妬みです。これらはみな、怒りに属するものですね。けれども、自分は正しいことをしていると思っていますから、自分が何を行ってやっているのか、盲目にさせてしまいます。

3B 人の悪口

そして、「『**愚か者**』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。」とイエス様は言われます。先の最後の審判において、そこで裁かれた者たちは、火と硫黄の燃える池に投げ込まれます。これは、人を見下すだけでなく、そのことを口に出して言うこと、罵ることです。ヤコブの手紙で、このことについての戒めが書かれています。「3:8-10 しかし、舌を制することができる人は、だれもいません。舌は休むことのない悪であり、死の毒で満ちています。私たちは、舌で、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌で、神の似姿に造られた人間を呪います。同じ口から賛美と呪いが出て来るのです。私の兄弟たち、そのようなことが、あってはなりません。」ヤコブは、はっきりと死と毒に満ちていると言っています。肉体的には殺していないかもしれませんが、相手の心に、そして魂を殺す効果をもたらす毒を持っているということです。

もう一度、繰り返しますが、ここで怒ってはいけない、ということを行っているではありません。罪に対して、悪に対して、主が怒られていると同じように、怒りや憎しみを覚えるべきです。私たちがキリスト者として成長すればするほど、主を畏れるがゆえに、悪を憎むことが多くなるでしょう。どれだけ、人の間に悪があるかを知らされ、そのために執り成しの祈りが多くなります。詩篇には、呪いの詩篇というのまでがあります。復讐を望む詩歌です。そして、主ご自身がパリサイ派や律法学者を始めとして、とても強い表現を使っておられます。使徒たちも、罪についてははっきりと述べています。

しかし、罪を憎んでも、罪人に対しては憐れみの思いが与えられる必要があります。その人は神の形に造られた存在です。その神の形が、神からではないものによって傷ついている姿を見て、憐れむのです。ユダの手紙には、権威を認めず、罵っている者たちのことについて、警鐘を鳴らしていますが、ユダはこう述べています。「21-23 神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに導く、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。ある人々が疑いを抱くなら、その人たちをあわれみなさい。ほかの人たちは、火の中からつかみ出して救いなさい。また、ほかの人たちは、肉によって汚された下着さえ忌み嫌い、神を恐れつつあわれみなさい。」イエス様の憐れみを待ち望みながら、反抗する人々に対して憐れみ、汚れきった人々に対して、その汚れを忌み嫌いつつ、火の中から救い出すように、憐れみの手を差し伸べなさいと言っています。

4A 供え物を置いた仲直り 23-26

23 節から、イエス様は、敵意について消極的な態度だけでなく、積極的に動かなければいけないことを語られています。「23 ですから、祭壇の上にささげ物を献げようとしているときに、兄弟が自分を恨んでいることを思い出したなら、24 ささげ物はそこに、祭壇の前に置き、行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから戻って、そのささげ物を献げなさい。」もし、私たちが、ただ心に敵意を抱かない、人を見下さない、そして罵りの言葉を言わないというだけであれば、主は、「そこだけに留まってははいけません。それだけでは、対処療法にしか過ぎなくなります。そうではなく、そのような敵意が出て来ることのないように行動に移すところまで持っていくことが必要です。積極果敢に、敵意があるような状況が起こることのないように、平和と秩序が与えられるように、和解が与えられるように動きます。

1B 儀式で償えない関係 23-24

ここで私たちは、「祭壇の上にささげ物を献げようとしているとき」とあります。礼拝の儀式をしているから、として、自分の罪は償われると思ってしまう過ちを犯します。いけにえを捧げているから、私と神との関係は正されたと思ってしまうのです。罪を償うために、これだけ祈りましたとか、聖書の言葉が与えられましたとか、そういった宗教的な行為でごまかしてしまうことがあるのです。パリサイ派の人たちは、律法の細かい面ではとても几帳面でしたが、仲間のユダヤ人を裁き、断罪し、見下していました。自分の払った犠牲についてはとても強く意識しているのに、他のキリスト者についての妬みや直視しようとしません。その妬みをむしろ、自分の献身的な行為によって隠そうとすることさえします。

主は、そういった偽りの宗教的行為を忌み嫌われること、そしてまことの宗教の行為は、人々との間に平和を持つことであることを語っておられます。「イザ 58:3-4 『なぜあなたは、私たちが断食したのに、ご覧にならず、自らを戒めたのに、認めてくださらないのですか。』見よ。あなたがたは断食の日に自分の好むことをし、あなたがたの労働者をみな、追い立てる。見よ。あなたがたが断食をするのは、争いとけんかのためであり、不当に拳で殴るためだ。あなたがたが今のように断食するのは、いと高き所に、その声は届かない。』」58:6-7 わたしの好む断食とはこれではないか。悪の束縛

を解き、くびきの縄目をほどき、虐げられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。飢えた者にあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見てこれに着せ、あなたの肉親を顧みることではないか。」

宗教的な犠牲で、主の命令をないがしろにした人の典型は、サウル王でした。主は彼に、アマレク人を聖絶しなさい、と命じられました。けれども、彼はアマレク人と戦いましたが、その王をいけどりにして、それから牛や羊の最良のものは惜しみました。そして、「それを、主にいけにえを献げるために、取っておいたのです」と言いました。これほど偽善的な言葉はありません。それで預言者サムエルは言いました、「15:22-23【主】は、全焼のささげ物やいけにえを、【主】の御声に聞き従うことほどに喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。従わないことは占いの罪、高慢は偶像礼拝の悪。あなたが【主】のこぼを退けたので、主もあなたを王位から退けた。」

2B 緊急を要する関係 25-26

「25 あなたを訴える人とは、一緒に行く途中で早く和解しなさい。そうでないと、訴える人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれることになります。26 まことに、あなたに言います。最後の一コドラントを支払うまで、そこから決して出ることはできません。」ここでは、緊急性について話しています。

緊急性と言え、箴言では、保証人になった時に、何としてでもそこから抜け出すようにしなさいという勧めがありますが、この話に似ています。「6:1-5 わが子よ。もし、あなたが隣人のために保証人となり、他人のために誓約をし、自分の口のことばによって、自分が罠にかかり、自分の口のことばによって、捕らえられたなら、わが子よ、そのときにはすぐにこうして、自分を救い出せ。あなたは隣人の手に陥ったのだから。さあ行って、伏して隣人にしつこくせがめ。あなたの目を眠らせず、そのまぶたにまどろみを与えるな。自分を救い出せ。かもしかが狩人の手から逃れるように、鳥がそれを捕る者の手から逃れるように。」私たちは、心は鳩のように優しくないとはいませんが、蛇のように聡くなりなさいとイエス様が言われたように、しなければいけないことをためらわずに、するべきです。

私たちは、人が相手で問題が起こった時に、どうしても相手が怒らせているのではないか、仲がうまくいっていないとか、そういった次元だけで考えてしまいがちです。けれども、地上の法廷だけでなく、天上の法廷のこともイエス様は視野に入れておられます。和解をしなければ、当時、借金をすると返済するまで牢獄に入れられていたのですが、それを生々しく知っていた人々が、天においてもそうになってしまうのだということを察することができるのです。神相手なのだ、ということです。神との関係のゆえに、神を畏れるから、人々がどういう状態であろうとも、自分自身は行っていくのです。